酒旗風外水村前、停櫂何人書畫船、醉後筆端無限興、湘南山暮薄籠烟　　默雲懶衲龍澤

能畫雪舟師予舊識也、因拙語示的嗣如水知藏　　群玉峰客龍統

如水不波心是水、有雲生谷迹同雲、阿翁毫末渾多了、今古江山說與君　　三浦桂悟

古人論畫似論禪、教外別傳王輞川、咫尺淡濃山既雨、天公水墨夕陽邊　　半隱周麟

於戲、詩畫禪の盛事この時に極まる。若しこれらの著語を心讀味解すれば、愈〻この畫は禪家が的子に向つて頂相を附與する意味に於て宗淵に畫き與へた一種の自畫像なることを知り得べく、そこに畫僧としてのわが雪舟の眞箇面目があり、眼があり口があり氣息があり氣呵がある所以を知り得よう。而して贊中默雲龍澤が西湖瑩玉溯を云爲するに至つては眼前の水墨が如何の系統に屬するかを示す貴重の資料といはねばなるまい。因にいふ、此畫は明治三十年頃まで京都の古刹慈照院にあり、そののち帝室博物館の有に歸したのである。（脇本）

右隻落款　　（原寸）

六、尾形光琳筆　梅圖

二曲屏風一雙　紙本金地着色　竪一・五六米　横一・七三米　　東京　伯爵　津輕義孝氏藏

水ぬるむ早春の一日。陽光煦々として、槎枒たる二株の老梅は、水を挾んで迭に妍を競ふ。靜閑の中に動くものはたゞ潺湲の響を絶たぬ水の流のみである。水は細く流れ來つて遠き水上を思はせ、末は大きな屈折を見せて末廣がりに遙かの下へ流れ去り、梅樹の巨幹は各〻强く外方に彎曲し、水流と梅樹と、その布置兩々相俟つて、畫面の外に廣大な天地を暗示してゐる。此圖に對してよく豪華雄大の氣宇を感ずるものは、賦彩の絢爛と、技法の巧緻との外に、主としてこの大膽な構想によることが多い。而もその巧妙秀拔なる構想を行るに暢達の筆路を以てし、優麗嫻雅の中によく勁健の氣を藏する所、洵に元祿の盛時を

飾る一代の巨擘が代表作と推すに躊躇しない。左隻にあつては紅梅の根本から派生する伸びやかな一枝は、よく彎曲せる巨幹を支ふるに足る力を見せ、右隻にあつては、白梅の梢頭斜に天を指す一枝は、恰かも臥龍の頭を昂げて雲を望むにも似た勢を示す。かくの如き嫩枝の快き張りを持つ描線と、流麗にして些かも澁滯の痕を見せぬ水文の描線とは、彼の畫技が天賦の才に加ふるに、正確な漢畫の素養と、撓まざる寫生の修練とによる事の大なるものがあるのを如實に物語つてゐると云へやう。

水流の部分を除いた地には金箔を置き、梅樹の枝幹は墨の沒骨描に白絲のたらし込を用ひ、苔斑は綠青の上に墨點或は胡粉點を打ち、梅花は濃き朱白の沒骨描の上に金泥を以て蕊を描く。流水は地に銀箔を置き、渦文を麩糊、膠、或は礬水の如き類を以て描き、後硫黃によつて地の銀を燻したものかと想像せられるが、或は何か光琳獨特の技法に出るものであるかも知れない。若し前記の如き手法によつたものとすれば、製作當初は黝黑の水流の表に銀色の渦文が鮮かに映發してゐたものであらうと思はれるのであつて、その手法は水の量感と流動感とを表現するのに甚だ效果あるものであり、燦爛たる金色と、寂びのある黝黑と、その上に浮き出た銀色との諧調は、豪華の中にも澁味を含んだ洵に心にくきものであつたであらう。但し今日では渦文の部分は何等銀色を認めず、黃褐色を呈し、極小部分には銀泥かと思はるゝ輝きをもつものが殘存してゐるやうに見える。春山武松氏に從へばこの特殊な技法を說明すべき資料が現今小西家に傳はる光琳關係資料中に存する由であるが、（世界美術全集第二十三卷參照）余は不幸にして未だ小西家文書を精査する機會を得てゐない。之を要するにこの技法の說明には尙研究に値ひすべきものが多々あると云はねばならない。

本圖左隻には靑々光琳、右隻には法橋光琳と款し、共に方祝の圓印を捺す。方祝圓印を有するものは、他に伯爵德川達道氏藏風神雷神圖屛風を擧ぐる事が出來るが、本圖の方祝印と風神雷神圖のそれとは大さその他に於て甚だ相似てしかも全く別印であり、今日小西家に傳へる所の方祝印は風神雷神圖のそれに近きものである。但し小西家に傳はる所謂光琳の印章、及この方祝印に就いては尙考ふべき問題があり、今日では早急の論斷を避け、本圖の正確なる落款印章の印影を揭載して事實を記述し、資料を提供するに止める。

落款は濃墨にして稍長鋒の筆を用ひたるもの丶如く、根津家藏燕子花圖屛風落款の豐潤なるに比し些か瘦羸の感あり、團家藏躑躅圖落款の輕快なるに比しては稍遲澁の感を伴ひ、光琳落款中上乘無比なるものとは言ひ難い。

然しながら本圖の如き、意匠筆致共に卓拔、眞に瞠目に値する傑作にして蓋し光琳畫研究の一標準たるを得るものであらう。因に本圖は本年一月國寶に指定せられた。（正木）

七、圓山應擧筆　昆蟲寫生册　東京　帝室博物館藏

帖裝　紙本着色　一圖　竪一一・五糎　横一二糎

近世畫史を顧みて、元祿享保以後に於ける狩野、土佐の流を汲む畫師の殆んどすべては、古人の所謂神韻を形似の外に求め、徒に傳來の摹本を倣へば、畫事の目的は盡きるものと構へて居つたのであるが、ひと度應擧が同じく狩野派の石田幽汀の門より出て、前蹟摸索の積弊を矯めて、專ら應物隨類の寫生に依

第一圖　扉　書　（原　寸）